（資料）

第 18 回舟橋聖一文学賞

第 36 回舟橋聖一顕彰青年文学賞

第１８回舟橋聖一文学賞
授賞者

作　品　名	火(ひ)の神(かみ)の砦(とりで)	出版社名	文藝春秋
著　　者	犬飼(いぬかい)　六岐(ろっき)		

第３６回舟橋聖一顕彰青年文学賞
入賞者

優秀作品

作　品　名	アスパラガスの女(おんな)たち	作品部門	小　説
作　　者	緒方(おがた)　水花里(みかり)	年　　齢	26歳
住　　所	福岡県		

第１８回舟橋聖一文学賞

犬飼　六岐

『火の神の砦』授賞者コメント

この度は栄誉ある賞をいただきありがとうございます。彦根市ならびに選考委員の皆様に感謝申しあげます。

小説のなかで風景を描くとき、実際に見たことのある景色をベースにするようこころがけています。本作の執筆にさいしても、島根や岡山の山道を歩いて、坂に汗を流し、森の空気を吸い、土の匂いを嗅ぎ、鳥の声を聴き、足元の草むらを這う物音に驚き、尾根から山間に漂う霞や谷間の集落を見おろしました。また取材を通じて刀剣やたたら製鉄に関わる方々にさまざまなご教示を賜り、青江の太刀を手にすることもできました。とくに現役の刀工である上田師にお会いしなければ、この作品はいまの形にならなかったと思います。

一冊の本をつくるのは、多くのひとの共同作業です。取材にご協力いただいた方々をはじめ、この本に関わられた大勢の皆様に、あらためてお礼を申しあげます。

犬飼　六岐　氏　プロフィール

1964年、大阪府生まれ。大阪教育大学卒業。

2000年、「筋違い半介」で小説現代新人賞を受賞してデビュー。

2010年、『蛻』が直木賞候補に選ばれる。

他著に『吉岡清三郎貸腕帳』シリーズ、『鬼坊主末法帖』シリーズ、『佐助を討て』『鷹の目』『青藍の峠』『叛旗は胸にありて』『逢魔が山』『ソロバン・キッド』『黄金の犬』など多数。

『火の神の砦』あらすじ

応仁の乱の戦火がいまだ冷めやらぬころ、若き日の陰流の祖・愛洲久忠は奥出雲のとある六斎市でひとりの女に目をとめる。女は路傍で鉄製の農具のほかに刀剣を売っていた。六斎市が終わると、久忠は女のあとを追って山中に分け入り、さらにその背後を謎の若侍が尾行する。

女は近郷の者かと思われたが、どれだけ歩いても足をとめない。久忠と若侍は距離も方角もわからなくなるほど彷徨い歩いたすえに、ようやく濃い霧に隠された小さな集落にたどりつく。そこは南北朝期に滅んだ備中青江派の刀工の末裔が暮らす、女だけの隠れ里だった。

久忠は里の刀工に望みどおりの太刀を打ってほしいと願い、引きかえにいくつか条件を出される。里のことを決して口外しないこと。近隣の山に棲みついた野盗を退治すること。また、里の女に子種を授けることなどである。久忠たちはやむなく条件を満たしていくが、やがて隠れ里の重大な秘密を知って逃亡を企てることになる。

『火の神の砦』　［ 選評 ］　　選考委員　　佐 藤　洋二郎

出雲は神々が棲む土地だと言われているが、宍道湖にかかる神々しい夕焼けを目にすると、本当にそんな気持ちになるが、その出雲の山深い里で女人たちだけで生活し、子孫はやってきた男性とまぐわって残す。また彼女たちは名刀も造っている。そこに出雲守護代の若者や名刀に魅せられた武士がやってきて、物語を構築する時代小説が本書。参考資料に寄りかからない想像性があり、文章もよく創作力もある。色気もあった。すでに活躍している小説家だが、先々を大いに期待させる予感のある作品だった。

第３６回舟橋聖一顕彰青年文学賞

優秀作品

作品名　小説　『アスパラガスの女たち』

作　者　緒方　水花里

受賞コメント

摂食障害や不妊症という難しい病気を扱ったので、評価を頂けて本当に嬉しいです。

もしもスーパー三徳の店員さんがあの時買い物に来た私に話し掛けていたら。そんな考えから話が膨らみました。私は「アスパラガスの女」と同じ摂食障害です。食べることは生きることだけれどそれらが上手く行きません。ですが、食べる食べないに関わらず生きるが上手くいかない人は社会に大勢いて、そういう人こそが生きるの大切さやどうしようもなさを知っています。病気と闘う登場人物達の姿からそれが表現出来ていたら良いです。

また、ルッキズムの蔓延、ありのままの自分の否定、男性中心社会、命のコントロールなどは現代社会が孕む問題です。それらにぶつかる登場人物達はただの病人ではなく社会全体の代弁者です。そういう意味でも「アスパラガスの女『たち』」なのだと思います。どうしようもない生と社会に日々ぶつかり涙する誰かの希望になりますように。

略歴

１９９８年１月２７日生まれの２６歳。福岡県福岡市出身。修猷館高校卒業後、早稲田大学文化構想学部に進学、大学在学中に詩人の伊藤比呂美師に出会ったことをきっかけに、詩・小説の創作を始める。第４回 SDGs「誰ひとり取り残さない」作文・小論文／クリエイティブコンテスト入賞。２０２３年金澤詩人賞入選。清流の国ぎふショートショート文芸賞入賞。『ユリイカ』・『現代詩手帖』多数入選。蝶尾出版『開かれた窓』。七月堂『インカレポエトリ』。同人誌『離合』。

あらすじ

スーパーで働く私は、商品を取っては戻しを繰り返す奇妙な女性客に出会う。痩せ細った姿から「アスパラガスの女」と名付けて動向を探るが、ある日を境に知り合いになり、彼女が摂食障害で、それが原因で奇行をしていると知る。しかし私自身も彼女とは違う問題を抱えていて・・・

第３６回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」　選考講評

選考委員　佐 藤　洋二郎

どうしてわたしたちは小説を書くのだろう。若い人の応募作品を読んでいて、なおかつ選考委員の人たちと受賞作を決めている時に、彼らのさまざまな内容に触れてふとそんなことを思った。今日の日本においていろんな分野の作品があることは承知しているが、なぜ書くのか、なにを書くのかという問いかけは、書き手にしかわからないことだが、書くという行為が自己を見つめる手立てになることだけは間違いないはずだ。

摩訶不思議という言葉がある。魔訶とは古代梵語でたくさんという意味で、不思議というのはわたしたち人間がいくら考えても理解できないことを指す。そのわからない混沌とした中心に神仏を立て、さもわかったふりをして日々を生きる。最も判然としないのがわたしたちの感情ではないか。天気のように日々変化するし、ほんのちょっとしたことで心を乱す。一番の精密機械が人間ではないか。そしてその摩訶不思議な人間の感情を、文章で捉えるのが文学や小説ということになるが、どんなジャンルにおいても人間が書かれていなければ作品は屹立しない。

本年度の受賞作は「アスパラガスの女たち」に決まった。スーパーの食品の栄養価やカロリーの表示を見ては棚に戻す若い女性。生きることは食べることとわかっていてもつい制限する。摂食障害でたまにふらつくこともある。だがやめられない。一方その店には不妊症で二度流産し、夫とともに現在も治療している女性がいる。彼女が店内をふらついている相手に声をかけたけたところから二人の交流が生まれてくる。

食べることを拒絶して体重が三十五キロの女性。子どもが授からないことに苦しむ女性。ともに生きることを望んでいるが、心は解放されることがない。「太っていても痩せていても莉里花さん可愛いよ」拒食症の女性はやさしい言葉に癒されていき、死にたいと思っていた感情も薄れていく。「私こそ生かしてくれてありがとう」やがて不妊症の女性は妊娠して子どもを生むが、作品の根底に流れているのは心の闇だ。

その闇が重い雲を分けて晴れ間を見せるのがこの作品だが、明るい陽射しは生きる希望を連れてくる。私たちが人生の指針にするものは金銭欲や名誉心ではなく、本当は生きる目標のほうが大切だ。なぜならそれが生きがいになるからだ。弱い私たちは励まし合い、慈しみ合い生きていく。そういう思いのこもった作品だった。そのことが受賞となったが、実は書くということは苦しくて大変に困難を伴う。頑張ってもらいたいと思っている。

第１８回　舟橋聖一文学賞

犬飼（いぬかい）　六岐（ろっき）　さん

※トリミング等、顔を触らない範囲での写真加工は可能です。

第３６回　舟橋聖一顕彰青年文学賞

優秀作品　緒方（おがた）　水花里（みかり）　さん

※トリミング等、顔を触らない範囲での写真加工は可能です。

舟橋聖一顕彰青年文学賞

過去の応募件数

年　度	青年文学賞	
	回数	応募件数
平成元	第1回	100
平成2	第2回	40
平成3	第3回	159
平成4	第4回	113
平成5	第5回	70
平成6	第6回	93
平成7	第7回	155
平成8	第8回	178
平成9	第9回	133
平成10	第10回	152
平成11	第11回	146
平成12	第12回	111
平成13	第13回	111
平成14	第14回	73
平成15	第15回	100
平成16	第16回	92
平成17	第17回	111
平成18	第18回	68
平成19	第19回	58
平成20	第20回	68
平成21	第21回	96
平成22	第22回	66
平成23	第23回	75
平成24	第24回	75
平成25	第25回	61
平成26	第26回	61
平成27	第27回	58
平成28	第28回	65
平成29	第29回	39
平成30	第30回	53
令和元年	第31回	25
令和2年	第32回	39
令和3年	第33回	40
令和4年	第34回	33
令和5年	第35回	45
令和6年	第36回	32

都道府県別応募件数

都道府県	応募件数（延べ）
北海道	
青森	
岩手	
宮城	
秋田	
山形	
福島	
茨城	
栃木	
群馬	
埼玉	2
千葉	
東京	9
神奈川	5
新潟	
富山	1
石川	2
福井	
山梨	
長野	1
岐阜	
静岡	1
愛知	2
三重	
滋賀	(1)　2
京都	1
大阪	2
兵庫	
奈良	
和歌山	1
鳥取	
島根	
岡山	
広島	
山口	1
徳島	
香川	
愛媛	
高知	
福岡	1
佐賀	1
長崎	
熊本	
大分	
宮崎	
鹿児島	
沖縄	
その他	
計	32

（　）内　彦根市再掲
15都府県から応募

※令和 2 年度から応募要件を変更し、満 18 歳～満 30 歳の年齢制限を満 13 歳～満 30 歳に引き下げています。なお、今回の応募最年少は 15 歳でした。

舟橋聖一文学賞規程

（趣旨）

第１条　彦根市民が豊かな心を育み、彦根市に香り高い文化を築くため、舟橋聖一文学賞を制定し、彦根市名誉市民である舟橋聖一文学の世界に通ずる文芸作品に対し、賞を授与するものとする。

（授与）

第２条　舟橋聖一文学賞の授与は、年１回とする。

（対象）

第３条　舟橋聖一文学賞の対象となる作品は、次の各号に掲げる要件を備える作品とする。

(1)　作品の種別が小説であること。

(2)　毎年６月１日を基準日とし、概ね同日前１年に刊行された単行本であること。

（選考委員会等）

第４条　前条に規定する表彰候補作品を選考するため、舟橋聖一文学賞選考委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会は、市長が委嘱する委員で構成する。ただし、舟橋聖一顕彰青年文学賞の選考委員との兼務は妨げない。

３　前項に規定する委員は４人以内とし、その任期は４年とする。ただし、再任は妨げない。

４　特に市長が必要と認めた場合は、顧問を置くことができる。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置く。

２　委員長は、委員会の委員の互選により定める。

３　委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

４　委員長に事故があるときまたは委員長が欠けたときは、委員長をあらかじめ指名した委員がその職務を代理する。

（会議）

第６条　委員会の会議は、必要に応じて委員長が招集し、委員長がその議長となる。

２　委員会の会議は、委員の半数以上が出席しなければ開くことができない。

３　会議の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

（授賞）

第７条　授賞作品は、委員会の意見に基づき、市長が決定する。

２　授賞作品は１作品とする。ただし、授賞作品がないときは、この限りでない。

３　賞は正賞および副賞とし、副賞は賞金とする。

（補足）

第８条　この規程に定めるもののほか必要な事項は、市長が定める。

付　　則

この規程は、平成１９年７月２０日から施行する。

付　　則

この規程は、平成２４年４月　１日から施行する。

付　　則

この規程は、平成２４年９月２３日から施行する。

第36回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」作品募集要綱

趣　旨

作家・故舟橋聖一氏は、井伊直弼公を題材にした小説『花の生涯』を執筆し、それが後に映画や演劇となり、また第1回のＮＨＫ大河ドラマとして放映されたことで、直弼公と彦根市の名が全国に知られるようになりました。そのため、本市では、このような多大なる功績をたたえ、同氏を彦根市名誉市民第1号にするとともに、広く青少年の文学奨励をはじめ、教育・文学の振興を図るため、同氏を顕彰する文学賞として、平成元年度から文学の登竜門となる「青年文学賞」を設けました。

今年度も下記のとおり全国の青年各位から優れた作品を公募します。

記

1　設 置 者　　彦根市

2　選考委員　　佐藤　洋二郎（作家）
藤沢　周　　（作家）
増田　みず子（作家）
富岡　幸一郎（文芸評論家）

3　応募要領

(1) 応募作品　　小説・随筆・戯曲・評論
※同一作品部門の応募は、1人1編に限る。

(2) 応募規定　　400字詰め原稿用紙50枚以内（随筆については、10枚以内でも可）で縦書きとする。
（ワープロ原稿の場合は、A4サイズ横･1行40字×25行で縦に印字し、400字詰め換算枚数を明記する。）自作未発表の作品に限る。生成AIの使用は不可とする。
※応募作品には、指定の応募票を記入および添付すること。

(3) 応募資格　　令和6年9月1日現在、満13歳以上満30歳以下
（平成5年9月2日から平成23年9月1日までに生まれた人）
ただし、今まで入賞した作品部門での応募はできない（佳作を除く）。

(4) 応募期間　　令和6年6月1日（土）～9月1日（日）（郵送の場合は、当日消印有効）

(5) 提出先　　〒522-0001　滋賀県彦根市尾末町8番1号
彦根市立図書館内「舟橋聖一記念文庫」事務局
電話　0749-22-0649

(6) 提出方法　　郵送または持参（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）

(7) その他　　※応募作品は、一切返却しない。
※入賞作品の著作権は、彦根市に帰属する。
※最終選考に残った作品は、受賞録に作品名、氏名等を記載することがある。

4　賞　　優秀作品には、「舟橋聖一顕彰青年文学賞」を授与する。
正　賞　　賞状および舟橋聖一色紙
副　賞　　金　15万円
※なお、佳作はなしとする。

5　発表期日　　令和6年11月～12月予定（報道関係に発表する。）

6　授 賞 式　　令和6年12月予定

令和６年度「舟橋聖一文学賞」「舟橋聖一顕彰青年文学賞」選考委員プロフィール

佐藤（さとう）　洋二郎（ようじろう）（作家）

昭和２４年６月　福岡県生れ 元日本大学教授

平成　７年　　「夏至祭」で**第１７回野間文芸新人賞**を受賞。

平成１１年　　「岬の蛍」で**第４９回芸術選奨文部大臣新人賞**を受賞。

平成１３年　　［イギリス山］で**第５回木山捷平文学賞**を受賞。

主な著書　　『夏の響き』『未完成の友情』『お母さんブタのダンス』『グッバイマイラブ』『TOKYO－BRIDGE 東京ブリッジ』『親鸞　既往は咎めず』『Y 字橋』『百歳の陽気なおばあちゃんが人生でつかんだ言葉』『偽りだらけ歴史の闇』『夜を抱く』など多数。

藤沢（ふじさわ）　周（しゅう）（作家）

昭和３４年１月　新潟県生れ　元法政大学教授

昭和５９年～平成８年　　書評紙「図書新聞」の編集者を務めた。

平成　５年　　「ゾーンを左に曲がれ」で作家デビュー。

平成　７年　　「外回り」第１１３回芥川賞候補。

平成　９年　　「サイゴン・ピックアップ」第１１７回芥川賞候補。

平成１０年　　「砂と光」第１１８回芥川賞候補。

平成１０年　　「ブエノスアイレス午前零時」で**第１１９回芥川賞**を受賞。

「死亡遊戯」「SATORI」「ソロ」「サイゴン・ピックアップ」野間文芸新人賞候補。

主な著書　　「紫の領分」「焦痕」「箱崎ジャンクション」「雪闇」「心中抄」「キルリアン」「波羅蜜」「武曲」「武蔵無常」「サラバンド・サラバンダ」「世阿弥最後の花」「鎌倉幽世八景」等。

増田（ますだ）　みず子（こ）（作家）

昭和２３年１１月　東京都生れ

昭和５４年　　「ふたつの春」「慰霊祭まで」で芥川賞候補。

昭和６０年　　「自由時間」で**第７回野間文芸新人賞**を受賞。

昭和６１年　　「シングル・セル」で**第１４回泉鏡花文学賞**を受賞。

平成　３年　　「夢虫（ゆめんむし）」で**第４２回芸術選奨文部大臣新人賞**を受賞。

平成１３年　　「月夜見」で**第１２回伊藤整文学賞**を受賞。

主な著書　　「道化の季節」「麦笛」「自殺志願」「内気な夜景」「火夜」等。

富岡（とみおか）　幸一郎（こういちろう）　（文芸評論家）

昭和３２年１１月　東京都生れ　　関東学院大学教授

昭和５４年　　「意識の暗室　埴谷雄高と三島由紀夫」で、**第２２回『群像』新人文学賞評論優秀作**を受賞。

平成　元年　　「内村鑑三」で第２回三島由紀夫賞候補。

平成２４年４月　鎌倉文学館館長に就任。

主な著書　　「戦後文学のアルケオロジー」「仮面の神学　三島由紀夫」「使徒的人間　カール・バルト」「千年残る日本語へ」「川端康成　魔界の文学」「平成椿説文学論」「入門　三島由紀夫」など多数。近著に「石原慎太郎の時の時 「戦後」への最後の反逆者」「ビジネスエリートのための 教養としての文豪」等。

「作家・舟橋聖一」のプロフィール

舟橋聖一は、明治３７年１２月２５日、東京市本所区横網町に生まれたが、幼少時代から病弱のため学校を欠席がちであった。７歳の時、祖母に連れられて初めて「市村座」の舞台を観劇し、８歳頃から少年雑誌・新聞小説に親しみ、９歳から１１歳にかけて二葉亭四迷の「平凡」、国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」、岩野泡鳴の「耽溺」、田山花袋の「蒲団」、泉鏡花の「高野聖」等を愛読した。この時代の読書で身につけた教養が、その後の芝居と相撲に一生の情熱を注ぐ環境を作り上げたものと思われる。

大正１１年（１７歳）、水戸高校に入学するや、同人雑誌「歩行者」の同人となり、戯曲「支配する力」など数篇を発表した。また、菊地小劇場の東屋三郎の紹介で、小山内薫の門下に入った。

大正１４年（２１歳）、東京帝国大学に入学。池谷信三郎・村山知義・河原崎長十郎等と新劇団「心座」を結成。また、学内の文芸雑誌、「朱門」を阿部知二・池谷らと創刊し、初小説「信吉の幻覚」を発表した。翌年「朱門」に発表した戯曲「痼疾者」が、直ちに５月、新橋演舞場で、「心座」によって上演され、上司小剣、秋田雨雀に認められた。９月には、戯曲「白い腕」を菊地小劇場で「心座」によって上演された。１０月には、この作品を今東光推薦で〈新潮新人号〉に発表して、初めてまとまった原稿料を得た。また、「心座」では今日出海と知り合う。

昭和３年（２４歳）、新人作家１９名による「新人クラブ」結成に参加。その機関紙「文芸都市」の同人となり、同人の井伏鱒二、外村繁らと親交を結び、戯曲「襤褸」を発表。３月、東京帝国大学卒業。卒論は、「岩野泡鳴の小説及び小説論」。卒業後、明治大学予科講師となる。「文芸都市」に評論「演劇時評」を毎回連載（～昭和４年８月）。文芸家協会会員になる。

昭和４年（２５歳）、「心座」退会。劇作家から小説家へ転向する。

昭和５年（２６歳）２月、畏友・今日出海らと劇団「蝙蝠座」を４月に、小林秀雄、吉行エイスケ、井伏鱒二、今日出海らと「新興芸術派倶楽部」を結成する。６月、〈新潮〉に戯曲「バンガロウの秘密」発表。戯曲集「愛慾の一匙」を処女出版した。１０月、〈文学時代〉に「海のほくろ」を発表し、川端康成の賞賛を受ける。

昭和７年（２８歳）、「あらくれ会」の同人となり、徳田秋声門下になる。上越線車中で傾倒していた谷崎潤一郎に出会う。

昭和８年（２９歳）、「行動」創刊。中心的役割を果たす。翌年１０月、「行動」に「ダイヴィング」を発表し、行動主義の宣言をして文壇の注目を引いた。おりから、フランスの新文学に現れた知識人の政治的参加の行動性が話題になる時勢だったので、舟橋氏の能動性が時代のオピニオンリーダーの役割を果たすことになった。この時培われた精神力が、戦後日本文芸家協会の再建に、言論統制に、税金問題に、自分の信念を押し通す実行性と合理主義を兼ね備えることになった。

昭和１０年（３１歳）、「行動」が終刊、舟橋氏の行動主義への緊張がスランプに陥ることになったが、短編小説「木石」、評伝「岩野泡鳴伝」が、再び舟橋文学の面目を確保せしめた。戦争中は、時世にもろともせず、昭和１６年（３７歳）から執筆し、終戦間際に完成した「悉皆屋康吉」は代表的傑作である。

戦後は、執筆に対する制約がなくなると、「裾野」、「雪夫人絵図」、「花の素顔」、「芸者小夏」など愛欲小説が次々に発表され、名実ともに舟橋文学が確立された。

昭和２６年（４７歳）、日本古典文学の代表作「源氏物語」を平易に現代語で戯曲化した。戦後の歌舞伎に新作の流行を生み、演劇史上画期的な作品である。また、現代語による古典物を普及させるなどその意義は大きい。国文学趣向を取り入れた「ある女の遠景」は異色のもので、昭和３８年（５９歳）に「毎日芸術賞」を受賞している。歴史小説では、「白い魔魚」・「夏子もの」に次いでベストセラーとなった「花の生涯」や自伝小説「真贋の記」・「文芸的グリンプス」がある。

昭和３９年（６０歳）に、彦根市名誉市民第１号。昭和４２年（６３歳）には、「好きな女の胸飾り」で「野間文芸賞」を受賞。同年に芸術院会員となり、昭和５０年（７１歳）に文化功労者に選任されるなど、その功績は枚挙に遑がない。

昭和５１年（７２歳）死去。（１月１３日）

明治大学文学部教授。文芸家協会初代理事長。日本相撲協会横綱審議委員会委員長。運輸省交通委員。文部省国語審議会委員。中央競馬会名誉顧問。日本近代文学館創立常務理事など。